T2R2 東京工業大学リサーチリポジトリ
Tokyo Tech Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

題目(和文)	観光まちづくりにおける地域遺産の成立と発展
Title(English)	Establishment and Evolvement of Local Heritage System in Community Development through Tourism
著者(和文)	津々見崇
Author(English)	TAKASHI TSUTSUMI
出典(和文)	学位:博士(工学), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:乙第4187号, 授与年月日:2021年12月31日, 学位の種別:論文博士, 審査員:十代田 朗,中井 検裕,齋藤 潮,土肥 真人,真野 洋介
Citation(English)	Degree:Doctor (Engineering), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:乙第4187号, Conferred date:2021/12/31, Degree Type:Thesis doctor, Examiner:,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

Powered by T2R2 (Tokyo Institute Research Repository)

別　　紙　１（論文博士）

論文審査の要旨及び審査員　　（2000字程度）

報告番号	乙 第　　号	学位申請者	津々見　崇	
論文審査員	氏　　名	職　　名	氏　　名	職　　名
	主査　十代田　朗	准教授	真野　洋介	准教授
	中井　検裕	教授		
	齋藤　潮	教授		
	土肥　真人	准教授		

本論文は、「観光まちづくりにおける地域遺産の成立と発展」と題し、全８章で構成されている。

第１章「序論」では、研究の背景と目的、既往研究の概括と本研究の位置付け、地域遺産等の用語の定義、研究の構成・方法を示している。研究の背景として、現代のオルタナティブ・ツーリズムの進展の中で、より真正な地域の姿が観光対象として重要化していること、また地域主導で地域資源の発見・評価や保存・活用を行う地域遺産活動が全国で取り組まれていることを挙げている。そうした全国各地の地域遺産活動を実証的に分析することで、「地域遺産成立・発展システム」モデルを構築し、さらには観光まちづくりにおける地域遺産活動の役割を明らかにすることを研究の目的としている。

第2章「観光まちづくりの段階論にみる地域遺産マネジメントの取組みの位置付け」では、まず諸文献での観光まちづくりの段階論における地域遺産マネジメントの取組みの位置付けを分析し、地域遺産マネジメントには6段階があることを提示している。また、発見・調査や評価・認定、活用への言及が多い反面、資源の管理保護が切り離される傾向があり、その解決に地域遺産が貢献できる可能性を示している。さらに観光資源として地域資源活用は重要だが、観光対象となるためには観光マーケティングが必要であることを考察している。

第3章「地域遺産の成立と取組みの特徴」では、全国 32 地域の地域遺産および地域遺産活動に対し、主にアンケート調査とその回答データを用いた数量化理論Ⅲ類・クラスタ分析によりタイプ分類した上で、遺産の発見・評価や保存・活用といった地域遺産マネジメントとの取組みの特徴を分析している。その結果、まず選定される資源の種類は文化財よりも幅広いこと、まちづくりとの関連が強く、選定基準では客観的なものよりも愛着や地域らしさの継承が重視されていることを明らかにしている。また目的や選定基準を元に3タイプに分類でき、開始時期や地域特性、景観政策との関連性があることを解明している。さらに民間団体の事例研究より、地域遺産を通じ新たな評価や刺激を期待する場合、選定基準を過度に厳密にせず自薦を推奨することで多様な推薦を集められ、選定に向けて議論することで地域遺産の意義が深まることを明らかにしている。

第4章「地域遺産の保存・活用とその多様化」では、活動期間が長い３地域(岩手県二戸市、新潟県長岡市、静岡県沼津市）を対象として、行政計画を対象としたテキスト分析および自治体の担当部局への対面調査により保存・活用の継続・多様化の要因について分析している。その結果、まず対象地域での取組み内容は周知・学習・参加・支援と幅広く、特に周知は殆どの地域で見られ、選定後2年後からは新規活動が少なくなることを明らかにしている。次に行政計画において地域遺産は、初期は愛着や誇りの醸成を目的に活用され、長期的には観光活用が企図され、資源の価値や地域自体の地域外への宣伝が試みられることを示している。特に住民が参加しやすい活動から始めたことで地域遺産への愛着が醸成され、遺産の磨き上げや宣伝に繋げることができたと考察している。また、3、4章の比較分析より、民間団体は活動を小さく始めて根気強く育成すること、行政団体は地域遺産の成立と発展を接続する総合的構想を持つことが肝要であることを導き出している。

第5章「奄美遺産の成立システムの構築および深化過程」では、第2章で提示した地域遺産マネジメントの6段階を用いて、鹿児島県奄美市他の「奄美遺産」に関して、過去30年間あまりの行政文書や観光パンフレット類、新聞記事等の資料および関係者へのヒアリング調査により、奄美遺産に関する成立や深化の過程について分析している。その結果、エコミュージアム概念の導入や世界自然遺産登録運動と連動する政策・計画が下地になっていることや、奄美遺産の成立過程では主観的・客観的価値の両方を導入し、集落－市町村－奄美遺産の多層構造を生み出したこと、観光商品への展開など他分野との接続を意図していたことを解明している。その上で奄美遺産の成立および深化過程を「奄美遺産成立システム」として整理し、その特徴を明らかにしている。

第6章「奄美遺産の観光振興への接続と観光まちづくりへの発展」では、第5章に引き続き「奄美遺産」を対象に、観光振興への接続について市の行政計画、市内 2 地区の観光まちづくりプロジェクト、世界自然遺産登録運動との関係から分析している。その結果、笠利地区では集落遺産を観光資源とし、着地型観光へ接続して、奄美遺産発展システムが構築されているが、住用地区では世界自然遺産登録運動の中で地域資源の発見・調査や評価が行われる等、地区間での違いがあることを示している。その上で「奄美遺産発展システム」として整理し、その特徴および観光まちづくりへの展開可能性について明らかにしている。

第7章「総合的考察」では前章までの分析結果を用い、地域遺産活動を通じた観光まちづくりについて、「地域遺

産成立・発展システム」モデルを構築し、その運用における要点を整理し、そのあり方と課題を検討している。
第 8 章「結論」では、各章で得られた成果をまとめるとともに、今後の課題について述べている。
以上を要するに、本論文は、全国の地域遺産活動の成立および発展過程を分析することを通じて、地域遺産の発見・評価と保存・活用ならびに観光に展開させることで可能となる、オルタナティブ・ツーリズム時代の観光まちづくりの方法論を示したものであり、今後の社会工学・都市計画学並びに実践的な観光まちづくりに貢献するところが大きい。よって本論文は博士（工学）の学位論文として十分な価値を有すると認められる。

注意：「論文審査の要旨及び審査員」は、東工大リサーチリポジトリ（T2R2）にてインターネット公表されますので、公表可能な範囲の内容で作成してください。